

[調査報告]

テレビ番組が視聴者に与える影響 (1)

—社会的規範意識と視聴体験との関連を求めて—

A Study of Effect of TV Program for Audience (1)

三宅 正太郎

Masataro Miyake

進藤 恵美

Emi Shindo

1 はじめに

近年、少年による犯罪が多発している。神戸で起きた児童連続殺傷事件に始まり、少年による犯罪が今でも度々ニュースで報道されている。これらの事件報道を見ていると多くの少年たちはホラービデオを好んでよく見ていたり、ホラー的要素の濃いゲームをしていたりといったような共通点が指摘されている。事件との直接の関係は無いにしろ、罪を犯した少年たちに何らかの影響を及ぼしているとの指摘が多く見うけられる。

以前からあったTVゲームも、昔と比べると今日でははるかにリアルで動きもなめらかであり自然な動きが見られる。内容においても目的意識の低い、ただ単に「敵を殺していく」といった残虐なものが多い。平成13年夏に起きた大分県野津町の隣家6人殺傷事件ではビデオやゲームの仮想空間の出来事とそうでない現実との格差が、犯人の少年にみられたともいわれている。

現代の残虐な少年犯罪が多発している背景には残虐なTVゲームやホラービデオが影響しているとまで言われている。しかし、罪を犯した少年たちがよく見ていたといわれているホラービデオは1980年代にアメリカで放映されており、その歴史は新しいものではない。罪を犯すまでの影響を与えられた子供は明らかに少ないのである。では、犯罪を起こした少年は何に影響されてしまったのか。同じ視聴経験があるにもかかわらず犯罪を起こした少年と起こさなかった少年がいる。

この違いの背景には、幼少期における子供への教育が関係している可能性も指摘されている。核家族化が進み、母親が社会に進出することで、「子供のお守りはテレビ」といわれるようになった。ある意味では親より権威のある「テレビ」が規範を示すようになったのである。そう考えると、幼少期の規範形成、つまり子供たちの善悪の判断形成には主にその頃見ていた番組が影響を与えていると言えよう。期の頃に子供たちが多く観ていたと思われるテレビアニメ番組等の視聴傾向を明らかにすることが緊要な課題であるといえる。さらに、核家族化における家族とのコミュニケーションの減少、テレビを観るときの家族環境も含めて明らかにすることが必要なのである。

2 研究の目的

よって、本研究の目的は次の4点にある。

- ① いじめ、暴力などの社会問題に対する意識を明らかにする
テレビアニメ番組が少年犯罪の低年齢化に与える影響を調べる場合に見る側の暴力に対する教育、耐性や社会的規範意識の様態、家庭でどのようなテレビ視聴体験を持っていたかなど本人の背景との関係を明らかにする。そのため、近年少年犯罪低年齢化がいわれているため、年齢差による意識の違いがあるかどうかを明らかにする。
- ② 規範意識調査により被験者が持っている社会的規範を明らかにし規範意識の差が視聴態度との関連を明らかにする。
- ③ 周囲の環境を明らかにし、家族や友達という周囲の環境が、メディアに対する考え方やそれによる影響を考察する。
- ④ テレビの視聴傾向により、大学生と中学生の観ているテレビアニメ番組を比較し、そのアニメがどのように影響を及ぼしているかを知る。

3 研究の方法

1. 研究方法

(1) アンケート調査

調査方法：質問紙法。教室で配布し、即回収して集計、分析。

調査実施期間：平成12年11月

調査対象者：大分市内公立中学校1～3年。男子99名・女子101名 計200名
大分市内私立大学2年。男子116名・女子6名 計122名
大分県立芸術文化短期大学1年。男子1名・女子59名 計182名

調査時間：約15分

(2) 調査項目：

- 1) いじめが起きる原因についてどう考えるか
- 2) 暴力についてどう考えるか
- 3) 中高生が日常にナイフを持つことについてどう思うか（記述式）
- 4) 現代の発達した「メディア」が子供たちに悪影響を及ぼし、少年犯罪の増加につながっているといわれていることについてどう思うか（記述式）
- 5) ① 「スポーツの訓練で監督が選手をきたえる練習がきつすぎて選手がけがをした」
誰に責任があるか
② 「炭鉱で爆発事故があり大勢の人が死んでしまった」誰に責任があるか
③ 「高校へ行きたい中学生が家庭の事情で進学できない」誰に責任があるかここか

テレビ番組が視聴者に与える影響（1）

らの設問は被験者が中学生だった頃のことについて問う。中学生はそのまま答える。

- 6) 一緒に暮らしている家族
- 7) その頃の自分の性格（記述式）
- 8) その頃の友人関係
- 9) 家にテレビが何台あったか（記述式）
- 10) テレビを誰と観ていたか（2つまで選択）
- 11) テレビを観た後それについて家族と会話があったか
- 12) 一日のうちどのくらいテレビを観ていたか
- 13) そのうちどのくらいテレビアニメを観ていたか
- 14) テレビの視聴態度
- 15) アニメについて
 - a. よく観ていたアニメ3つ（記述式）
 - b. そのアニメを観て感じたこと、思ったこと
 - c. そのころよくした遊び

4 アンケート結果と考察

1. いじめ、暴力などの社会問題に対する意識

1) いじめの起きる原因

「いじめが起きる原因についてどう思うか」の問いの結果を図1に示す。

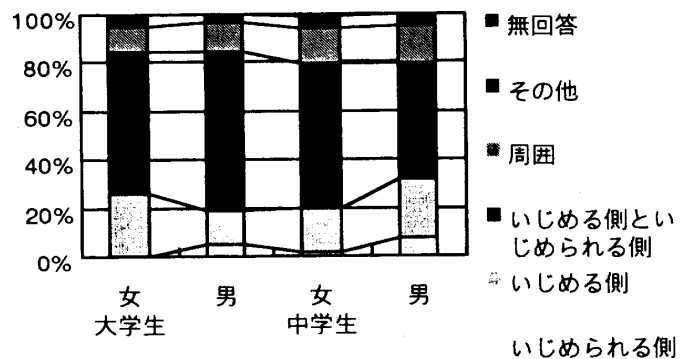
「いじめられる側が悪い」と答えた人は大学生182人中女子が0%（0人）、男子が5%（6人）で、中学生200人中女子が2%（2人）、男子が7%（7人）であった。

「いじめる側が悪い」は大学生182人中女子が26%（17人）、男子が14%（16人）、中学生200人中女子が18%（18人）、男子が25%（25人）であった。

「両方に問題がある」は大学生182人中女子が58%（38人）、男子が66%（77人）、中学生女子が59%（60人）、男子が47%（47人）であった。

「周囲が気付かないのに問題がある」は大学生182人中女子が11%（7人）、男子が12%（14人）、中学生200人中女子が15%（15人）、男子が15%（15人）であった。

「その他」は大学生182人中女子が5%（3人）、男子が3%（4人）、中学生は200人中、女子は5%（5人）、男子が5%（5人）であった。



まず、大学生の群で見てみる。「いじめられる側に原因がある」と回答したのは男子のみに見られる。さらに「いじめる側」と答えた男子は女子と比べてその約半数でしかない。男

子は「いじめる側といじめられる側」を含む「いじめられる側に原因がある」と答えた率は71%にも及ぶ。（「いじめる側といじめられる側」を含む「いじめる側に原因がある」と答えた人の率は91%。）また女子も58%が少なからず「いじめられる側に原因がある」と答えたことから、いじめが起きるのは「いじめられる側」にもその原因があると考える人が多いことがわかった。

中学生は、「いじめられる側」のみに原因があると答えた人が男女ともにみられる。しかし「いじめる側」と答えた男子も多く、いじめが起きる原因として意見が分かれるようだ。また中には『いじめる側も悪いが、うじうじしているいじめられっこも悪いと思う。もっと強い考えを持ったほうがいい』と記述した男子もいた。

大学生、中学生を比べたところ、「周囲」に原因があると答えたのは大体同じぐらいの割合である。やや中学生男女のその率が高いのは、近年の学級崩壊につながりがあるのかもしれない。さらに大学生男子と中学生男子に「いじめられる側が悪い」と答えた人が若干多くみられる。テレビなどで報道されている「いじめ」は、被害者・加害者に男子が多く、「いじめられる側に原因がある」と答えた人に男子が多いのはそのためなのかもしれない。「いじめる側に問題がある」と答えた人は思ったより少なかった。先程のようにいじめられる側にも、そしていじめられる側にも問題があると考えている人が多いためであるといえる。

2) 暴力について

「暴力についてどう考えるか」の結果を図2に示す。

「暴力は決して許されない」と答えた人は大学生女子で58%（38人）、男子で44%（52人）、中学生女子で57%（58人）、男子で45%（45人）であった。

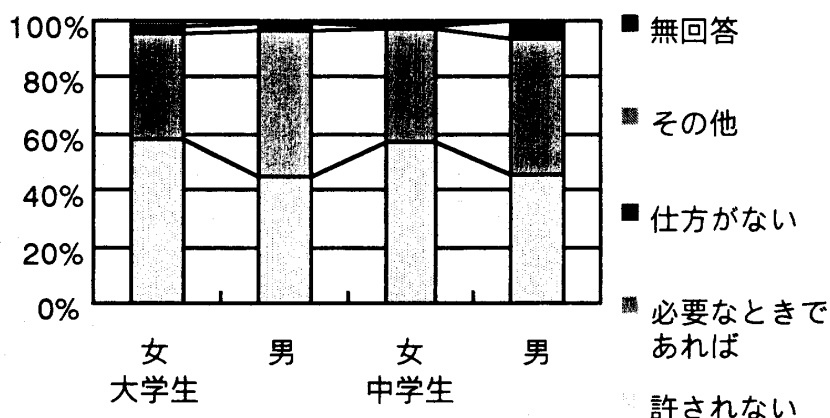


図2 暴力について

「必要なときであれば暴力を振るってもよい」は大学生女子で37%（24人）、男子で52%（61人）、中学生女子で40%（40人）、男子で48%（48人）であった。

「暴力を振るうことは仕方がない」は大学生女子で3%（2人）、男子で3%（3人）、中学生女子で1%（1人）、男子で6%（6人）であった。

「その他」は大学生女子2%（1人）で、男子は1%（1人）、中学生女子では1%（1人）、男子は0人であった。

この問いでも、年齢における意識の違いより性別における意識の違いがみられる。大学生、中学生ともに共通して男子に「必要なときであればよい」と答えた人が多くいた。その中に「しつけのためなら多少暴力を振るうことはよい」と記述した人もいた。これは少子化により甘やかされて育てられている子どもが多いといわれている中で、しつけによる暴力は必要だと考えていることと受け取れる。

一方女子は「暴力は決して許されない」と答えた人が一番多く、その理由の中には「しつ

テレビ番組が視聴者に与える影響（1）

けなどで手をあげることは暴力ではない。暴力を振るうことはよくないことだ」という記述があった。これらのことから『暴力』のとらえ方に男女で差がうかがえる。

この設問では「暴力」に対する説明が曖昧であった。もう少し詳しく調べる必要がある。

3) 中、高生が日常にナイフ持っていることについて

「中、高校生が日常にナイフを持ち歩いていることが問題となっているが、それについてどう思うか」の結果を表1に表す。この設問は記述式であったため後にそれぞれの部類にわけ集計した。

表1 ナイフ所持に対する考え（大学生）

a) 大学生の場合

表1は、大学生が「中高生がナイフを日常に所持していることについて」の結果である。ナイフを持つことに否定的な答えをした人は全体の82%（153人）に及んだ。そのうち最も多い答えが「ナイフを持つのは危険だ、危ない」で186人中14%（26人）、続いて「普段持つ必要がない」と答えたのは12%（23人）、「ナイフを持つのはいけない、良くない、悪い」と答えた人は12%（22人）「怖いことだ、恐ろしい、近づきたくなきたくない」と答えたのは11%（20人）だった。またナイフを持つことに肯定的な意見だった人は全体の10%（19人）であった。内訳としては「護身用なら良い」4%（8人）、「持っても良い」3%（6人）、「時代の流れだから仕方ない」2%（4人）、「カッコいい」1%（1人）となっている。

また「別に何とも思わない」2%（4人）、「わからない」1%（2人）「無回答」4%（8人）といった回答は、社会や世間への批判の現れであろう。

	人数	率
危険、危ない	26人	14%
普段持つ必要がない	23人	12%
ナイフを持つことはいけない、よくない	22人	12%
怖い、恐ろしい	20人	11%
なぜ持っているかわからない、何につかうのか?	15人	8%
ナイフを持つことはおかしい	12人	6%
かっこわるい	11人	6%
ナイフを持つ人は実に弱い人間だ	10人	5%
護身用のためならよい	8人	4%
別に持っても良い	6人	3%
学校や親が、教育すべき	5人	3%
別に何とも思わない	4人	2%
時代の流れなので仕方ない	4人	2%
学校や親が厳しく取り締まる、持つのを禁止すべき	3人	2%
ナイフの販売を厳しくすべき	3人	2%
持っている人のまねをしている	2人	1%
カッコいい	1人	1%
わからない	2人	1%
分類不能	1人	1%
無回答	8人	4%
計	186票	100%

中高生が日常にナイフを所持することについて・否定意見

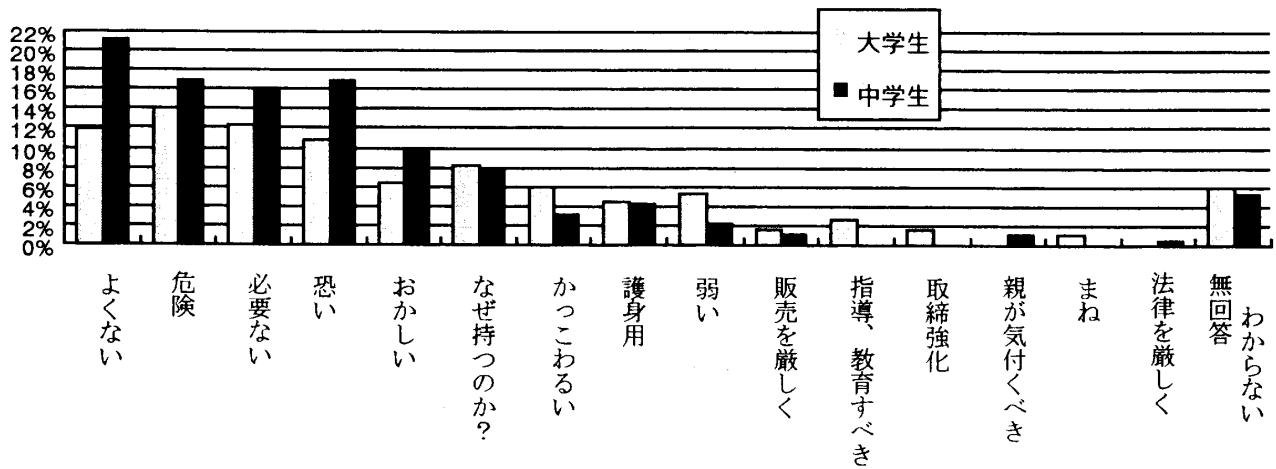


図3 中高生が日常にナイフを所持することについて・否定意見

b) 中学生の場合

表2は、中学生が「中高生がナイフを日常に所持していることについて」の自由記述を分類した結果である。ナイフを持つことに否定的な答えをした人は全体の79% (185人) に及んだ。そのうち最も多い答えが「ナイフを持つのは悪いことだ」で17% (40人)、続いて「怖い、恐ろしい」と答えたのは14% (32人)、「危険、危ない」と答えた人は14% (32人)、「持つ必要がない」と答えた人は13% (30人) だった。またナイフを持つことに肯定的意見だった人は全体の

表2 ナイフ所持に対する考え (中学生)

	人数	率
ナイフを持つことは悪いことだ	40人	17%
怖い、恐ろしい	32人	14%
危険、危ない	32人	14%
普段持つ必要がない	30人	13%
ナイフを持つのはおかしい	19人	8%
迷惑をかけなければ良い、使わないなら良い	19人	8%
なぜ持っているのかわからない	15人	6%
護身用なら良い	8人	3%
ナイフを持つことはかっこわるい	6人	3%
別に何とも思わない	6人	3%
かっこいい	5人	2%
ナイフを持っている人は弱い人間だ	4人	2%
別に持っていて良い	2人	1%
未成年に売ってはいけない	2人	1%
気づかない親が悪い	2人	1%
便利だ	1人	0%
法律を厳しくする	1人	0%
分からない	2人	1%
分類不能	2人	1%
無回答	6人	3%
計	234票	100%

14% (33人) であった。内訳としては「護身用なら良い」3% (8人)、「かっこいい」2% (5人)、「持っていて良い」1% (2人)、「常識がある人なら良い」1% (2人)、「便利だ0% (1人) となっている。

c) 大学生と中学生との比較

図3は「中高生が日常でナイフを所持していることについて」の大学生と中学生の否定的意見を集計し比較したグラフである。大学生で最も多いのは「危険、危ない」中学生では「悪い、いけない」が最も多い。また大学生である立場から「販売を厳しくするべきだ」「学校や親がもっと指導、教育するべき」と答えている人が大学生に見られる。中学生の中には「法律をもっと厳しくした方がよい」と責任の所在を国においている人もいた。アンケートは記述式であったため、複数回答となったが、中学生の方が「中高生が日常にナイフを所持していることについて」の意見を身近なものとして答えていた。実際に「ナイフを持っている人は怖い」と答えた人が多いことからいえる。私たち大学生ももっと身近な社会問題として考えるべきであろう。

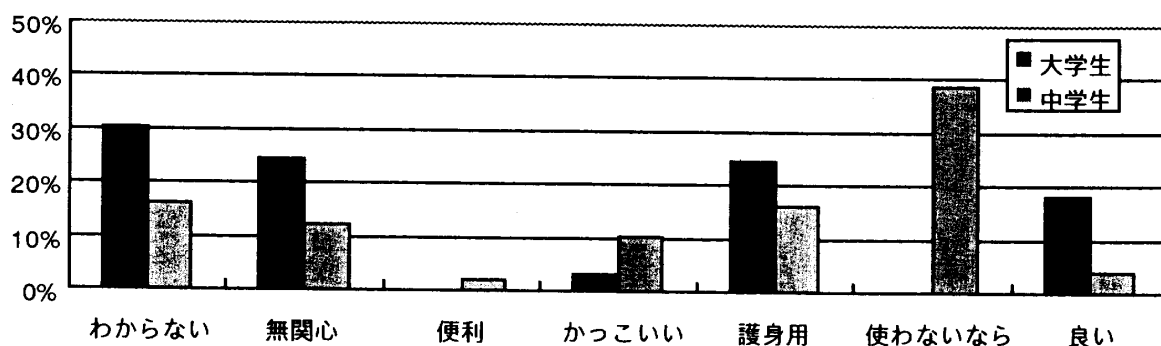


図4 ナイフ所持について・肯定意見

d) 肯定意見

図4では「中高生が日常にナイフを所持していることについて」の肯定意見の結果である。肯定意見もしくは無関心であったのは大学生が18%（33人）、中学生は21%（49人）だった。

「護身用なら良い」と答えたのは大学生33人中24%（8人）、中学生では49人中16%（8人）であった。大学生の方がやや中学生より多くみられる。中学生の中には「ナイフを持っていないと危ない時代になってきた。自分の身は自分で守るしかない」と答えた者もいた。「常識があるなら良い、使わないなら良い」と答えたのは大学生33人中0人に対して、中学生では49人中39%（19人）にも及んだ。現代の中高生がキレやすいと言われている中でこの回答が最も多かったのは危険なことであると言える。

大学生に目立つのは「別に持っても良い」18%（6人）といった無関心な答えである。さらに、「わからない、無回答」30%（10人）であったのも中学生16%（8人）より多くみられる。ナイフを持つことに反対である人たちは大学生が83%、中学生が79%、ナイフを持っていても良いと答えた人たちは大学生が18%、中学生が21%であった。現在も社会問題となっているこの問題を私たちは深刻に考えていかななくてはならないものと考えられる。

4) メディアによる影響について

「テレビやパソコンなど、『メディアからの情報』が子供たちに悪影響を及ぼし、そのために少年犯罪が多発化しているといわれるが、それについてどう思うか」の自由記述を分類

整理した結果を表3・4に示す。

a) 大学生の場合

表3は、大学生の「メディアの影響について」の結果である。全体の回答数は179票であった。そのうち最も多い回答率だったのが「影響がある、マスコミがもう少し考えるべきだ」と答えた人で26% (46人) だった。次いで「情報を受け取る側に問題がある、ありのままを受け入れる子どもが悪い」と答えた人は18% (33人)、「影響はない、関係ない」と答えたのは11% (20人)、「犯罪が

起きるのは親のしつけがなっていないから」と答えた人も多く、8% (14人) であった。また「メディアだけが影響を及ぼしているとは言えないが、少しは問題がある」と答えた人は7% (12人) であった。またこの問題に関して無関心ととれる人は全体の16% (29人) に及んだ。

b) 中学生の場合

表4は中学生の「メディアの影響について」の結果である。全体の記述回答数は208票である。

最も多かった回答は「影響がある」で34% (70人) であった。次いで「影響はない、関係ない」は13% (28人)、「少しは影響がある」は9% (19人)、「情報を受け取る側に問題がある、子どものとらえ方が悪い」は9% (19人) であった。中学生のほとんどが「影響がある」と答えており、「最近のテレビはリアルで暴力的なものが多い」という回答もみられた。また「テレ

表3 メディアの影響 (大学生)

	人数	率
影響がある、マスコミ側の管理や自主規制が甘い	46人	26%
情報を受け取る側に問題がある、 子供のとらえ方が悪い	33人	18%
影響はない、関係ない	20人	11%
親のしつけがなっていない	14人	8%
少しは影響がある	12人	7%
影響があると決めつけるのは良くない、 大人がしつけに失敗したときの責任逃れ	6人	3%
現代社会に問題がある	6人	3%
親、家庭環境に問題がある	6人	3%
テレビゲームは影響がある	4人	2%
法律を改正すべき	3人	2%
仕方がない	3人	2%
別に何も思わない	3人	2%
わからない	4人	2%
分類不能	3人	2%
無回答	16人	9%
計	179票	100%

表4 メディアの影響 (中学生)

	人数	率
影響がある	70人	34%
関係ない、影響はない	28人	13%
少しは影響がある	19人	9%
情報を受け取る側に問題がある、 子供のとらえ方が悪い	19人	9%
テレビゲームは影響している	9人	4%
別に何とも思わない	7人	3%
犯罪は本人の意思である メディアに影響されたというのはいいわけ	7人	3%
親、家庭環境に問題がある	5人	2%
親のしつけに問題がある	3人	1%
わからない	18人	9%
分類不能	4人	2%
無回答	19人	9%
計	208票	100%

テレビ番組が視聴者に与える影響（1）

ビゲームは影響がある」と答えた人がみられた。「リセットボタンを押せば主人公は甦る。だから生命を簡単に考えてしまうようになってしまふようになってしまふかも」という回答もみられた。「親、家庭環境」「親のしつけ」の回答数が少ないことから、中学生達は家庭でのしつけ、教育の在り方に原因があるという意識はほとんどないということが読みとれる。

c) 大学生と中学生との比較

結果を比較したものを図5に示す。

「メディアが子ども達に影響している」と答えたのは大学生26%（46人）より中学生34%（70人）に多くみられる。逆に「情報を受ける側の問題」と答えたのは大学生18%（33人）、中学生9%（19人）と大学生の方が多い。また「親のしつけがなっていない」と少年犯罪の原因として問題であるとする人も大学生8%（14人）、中学生でも1%（3人）といることがわかった。しつけをうまくされずに育った子ども達に、テレビで入ってくる情報を自分勝手に解釈して、他の子どもを殴ったり蹴ったりすることがどういうことなのか、その意味を教えるのはやはり親であるという考えである。意外なことは、昔と違って過激になってきたメディアであるというのに、昔を知らない中学生よりも大学生のほうが「メディアからの影響がある」と答えた人が少なかったことだ。小子化や核家族化になるにつれて子供たちが相手の気持ちを考えるとといったような、人と人との関係を学び体得する場が少なくなっている。

アニメや映像やゲームが、少年が犯罪を起こすまでの影響を及ぼすまでにはなく、あくまで疑似体験を与えているだけであるが、子どもたちの内遊びや後の「テレビとの接触率」はますます多くなってきているのは確かなのである。一方メディアはよりリアルになり、人に感銘や教訓を与えることも、また悪影響を及ぼすこともありえることなのである。

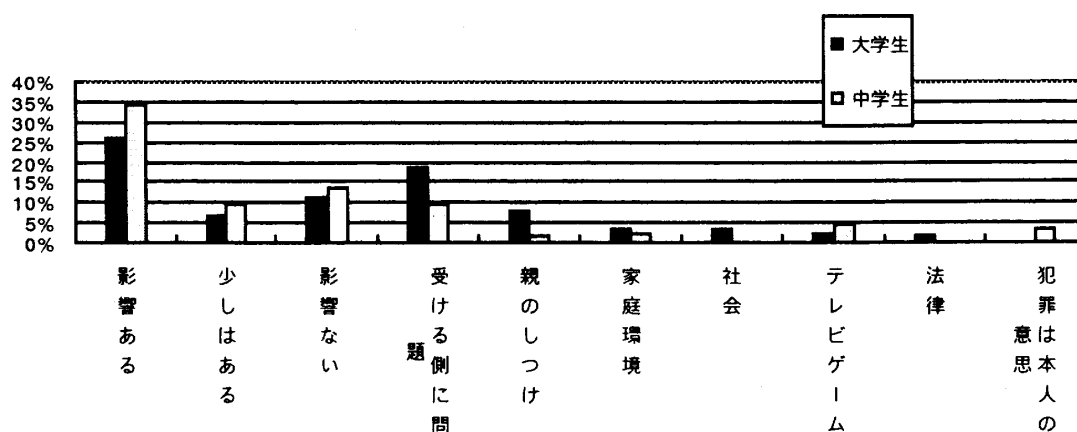


図5 メディアの影響（中学生大学生比較）

2. 規範意識調査

ここでの問いは、社会的規範について問うものである。麦島の研究によると、被験者の責任等の見方と、その後の被験者の非行者率を明らかにしたものがある。

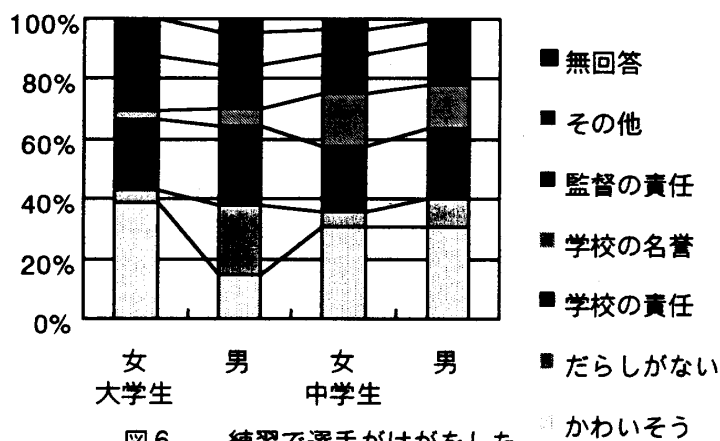
この実験は、例えば、事件や事故などがあつたときに、私たちはその責任を誰かに求めようとする。するとその責任の求め方にその人の社会的態度は現れる。このことから、被験者がどのような責任の求め方をしたか、またそれによってその後非行化しやすい回答を明らかにしたものである。

麦島による結果では、非行少年には社会の価値観に従い、保守的の態度を持っている者が多いと読みとることができた。逆に、個人の弱い立場をかばい、人を責めずに組織に責任を求める態度を示した少年は、将来における非行率が少ないようだ。社会に反した「非行」にはしることは、この社会における規範意識が低い結果であると考えられる。それをもとに、調査の結果を考察してみる。

1) スポーツ選手のけがの場合

「スポーツの訓練で監督が選手を鍛える練習がきつすぎて、選手の一人がけがをした。それについてどう思うか」の結果を図6に示す。

「学校の名誉のためなら仕方がない」と答えた人は大学生182人中女子が3% (2人)、男子は6% (7人)で、中学生は200人中女子が18% (18人)、男子が14% (14人)である。「選手は



「選手はだらしない」は大学生182人中女子が5% (3人)、男子は23% (27人)で、中学生女子が5% (5人)、男子は10% (10人)だった。「選手がかわいそうだ」と答えた人は大学生182人中女子が38% (25人)、男子は15% (17人)、中学生は200人中女子31% (31人)、男子は30% (30人)だった。「学校の責任だ」と答えた人は大学生182人中女子が23% (15人)、男子は26% (31人)で、中学生は200人中女子が22% (22人)、男子は23% (23人)だった。「監督の責任」と答えた人は大学生182人中女子が18% (12人)、男子が15% (17人)、中学生200人中女子が13% (13人)、男子が14% (14人)だった。「その他」では大学生で23% (21人)、中学生は15% (15人)で、ともに「誰のせいでもない」「仕方がない」「分からない」という答えに分かれた。「無回答」は大学生全体で4% (5人)、中学生全体で5% (5人)だった。

表5、図7は麦島の結果によるとその後の非行率が際立って高いのは「学校の名誉のために選手のけがは仕方がない」と答えた人 (11.2%)で、次に高いのは「選手がだらしない」と答えた人 (6.9%)である。

結果から、事故の当事者、つまり選手を責めた者から非行者が発生しやすくなっているこ

テレビ番組が視聴者に与える影響（1）

とがわかる。学校やその人が属している組織は優先して大事に考えられているようだ。反対に、「直接の監督者は非人間的だ」と責め、あるいは「選手に同情して学校を責める」者からは非行者の発生が少ないといえる。

図6をみたところ、「かわいそう」と答えたのは大学生男子の率が明らかに低いことがわかる。また中学生男子もその率がやや低いように思える。さらに「選手はだらしがない」と事故の当事者を責めたものも大学生男子に多い。これもまた中学生男子にやや多くみられる。麦島の調査の中で最も非行化率の高かった「学校の名誉のためならしかたがない」と答えたのは全体的に中学生に多く、大学生と比べても倍以上の率になっている。一方実際に責任の所在があるといえる「監督」や「学校の責任」と答えたのはどちらもやはり大学生に多い結果となっており、その非行化率は低い。

中学生の意識では非行化率の高い項目の選択をしており、社会的な発達が未熟であるととらえることができる。それが経験や知識の少なさが原因なのか、現代社会の環境によるものなのか考えるとところである。

2) 爆発事故の場合

「炭坑で爆発事故があり、大勢が死んだ。誰が一番責任があるか」のアンケート結果を図8に示す。「現場の労働者に責任がある」と答えた人は、大学生182人中女子が15%（10人）、男子が8%（9人）、中学生200

表5 練習で選手がけがをした

選択肢	回答者数	非行者率
学校の名誉のためには仕方がない	376人	11.2%
選手はだらしがない	1056人	6.9%
選手がかわいそうだ	1297人	5.6%
学校全体が責任を持つべきだ	1867人	5.5%
監督は非人間的だ	911人	4.4%
無回答	252人	6.7%
全体	5759人	6.0%

麦島 文夫 1990年

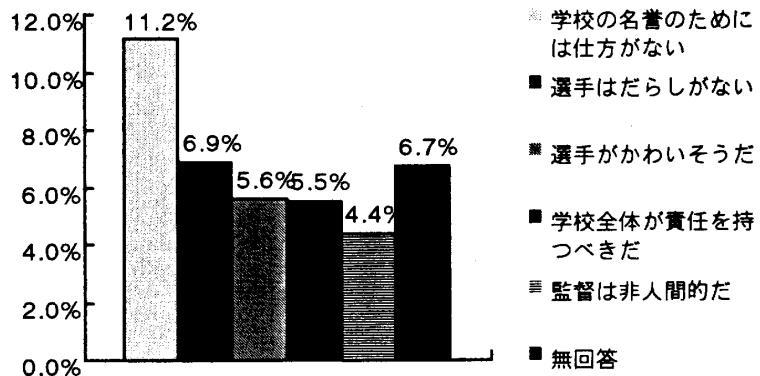


図7 非行者率

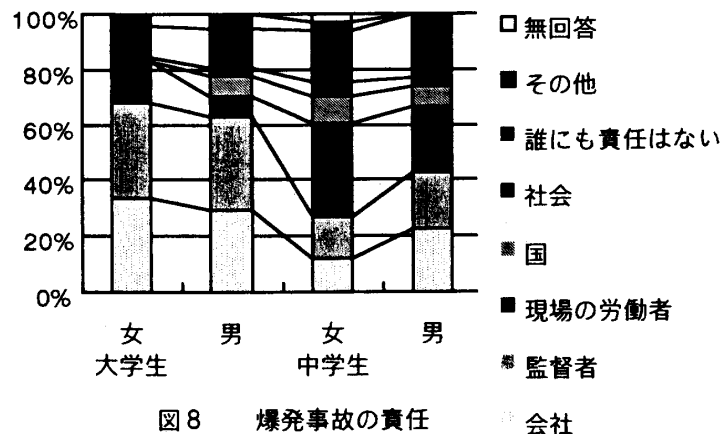


図8 爆発事故の責任

人中女子が34% (34人)、男子が24% (24人) だった。「会社に責任がある」と答えた人は、大学生182人中女子が34% (22人)、男子が29% (34人)、中学生200人中女子が12% (12人)、男子が22% (22人) である。「現場の監督者に責任がある」と答えた人は、大学生182人中女子が34% (22人)、男子が33% (39人)、中学生200人中女子が15% (15人)、男子が20% (20人) だった。「国に責任がある」と答えた人は、大学生女子が0人、男子が8% (9人)、中学生女子が10% (10人)、男子が7% (7人) で、全体的には7%と少ない。「社会に責任がある」と答えた人は全体的に一番少ない3%で、大学生女子が2%、男子が3%、中学生女子が5%、男子が3%。しかし

「誰にも責任はない」と答えた人は、大学生女子が11%、男子が15%、中学生女子が19%、男子が23%で、主に中学生に多くみられる。「その他」は大学生が10%で、中学生が3%だった。「無回答」は全体の3%で少ない。「社会」と答えた者は非行率が高く、具体的な回答のできない者が非行への道をたどりやすいといえる。

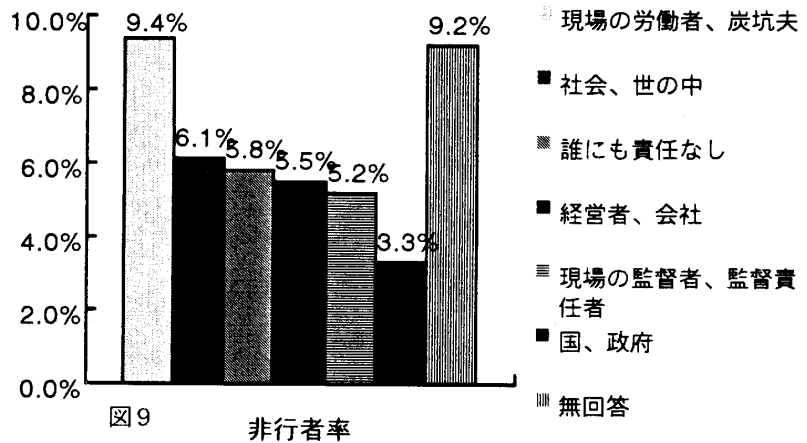
表6、図9の麦島によると、炭坑爆発の結果でも、事故の当事者である「爆発の現場にいた炭坑夫」に責任を求める者からの非行率が高くなっている。反対に、現場の責任者である「監督者」や「会社組織そのもの」さらに炭坑を指導すべき立場の「国や政府」に責任をもためた者からの非行率は低い。またこの場合、「無回答」などの回答不能者や、責任の所在が漠然としている「世の中」や「社会」と答えたものの非行化率が高く、具体的な回答ので着ないものが非行の道をたどりやすいと言える。

図8をみたところ、大学生で明らかな違いが見られるのは「現場の労働者」「国」「誰にも責任はない」の項目である。女子は「現場の労働者」に責任の求め方をしており、文献からやや非行か率が高いことになる。一方男子は「現場の労働者」を選んだ者は全体的に見ても低い。また男子には「国」を選んだ率が高く、炭坑を全体的に指導すべき立場である「国」に責任の所在があるとしている。中学生では、男女に違いが見られる回答が多いように思え

表6 爆発事故の責任

選択肢	回答者数	非行者率
現場の労働者、炭坑夫	265人	9.4%
社会、世の中	379人	6.1%
誰にも責任はなし	397人	5.8%
経営者、会社	1904人	5.5%
現場の監督者、監督責任者	879人	5.2%
国、政府	892人	3.3%
無回答	1043人	9.2%
全体	5759人	6.0%

麦島 文夫 1990年



テレビ番組が視聴者に与える影響（1）

る。「会社」とこたえたのは男子に多く、その非行化率は低い。中学女子も「現場の労働者」を選んだものが多く、全体的にみても一番回答率が高かった。また、麦島研究で高い非行化率を出した「無回答」も中学女子のみにみられた。

全体的にみると、大学生と中学生では「会社」「監督者」「労働者」の答えに明らかな違いが見られる。大学生はやはり今までの様々な経験や知識があるからか、「会社」や「監督者」といった実際にその責任の所在があるものの回答率が中学生より高い。中学生は事故の当事者であるにも関わらずその責任を「現場の労働者」に求めている、非行化率も高い項目であることから、社会規範における人格の形成がまだ未熟な段階であるといえる。

3) 高校へ行けない中学生の場合

「高校へ行きたい中学生が、家庭の事情でいけない。誰に責任があるか」のアンケート結果を図10に示す。「本人自身に問題がある」と答えた人は、大学生182人中女子が3%（2人）、男子が9%（11人）、中学生200人中女子が14%（14人）、男子が14%（14人）だった。「親の責任」と答えた

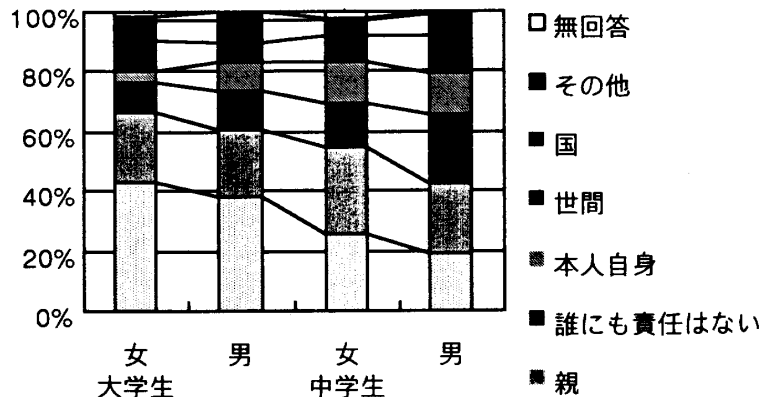


図10 学校へ行けないのは誰のせい？ 教育制度

人は、大学生182人中女子が23%（15人）、男子が23%（27人）、中学生200人中女子が29%（29人）、男子が23%（23人）であった。「誰にも責任はない」と答えた人は、大学生182人中女子が11%（7人）、男子が13%（15人）、中学生200人中女子が15%（15人）、男子が23%（23人）だった。「国に問題がある」と答えた人は、大学生182人中女子が6%（4人）、男子が8%（9人）、中学生200人中女子が5%（5人）、男子が7%（7人）。「教育制度」と答えた人は大学生182人中女子が43%（28人）、男子が38%（44人）、中学生200人中女子が26%（26人）、男子が19%（19人）だった。「世間に問題がある」と答えた人は、大学生182人中女子が11%（7人）、男子が7%（15人）、中学生200人中女子が9%（9人）、男子

表7 学校に行けないのは誰のせい？

選択肢	回答者数	非行者率
本人自身	294人	8.5%
家族、親	1633人	6.6%
誰にも責任はない	589人	5.4%
国、国家	840人	5.0%
政府、国の教育制度	661人	4.4%
社会、世間	842人	3.7%
無回答	900人	8.8%
全体	5759人	6.0%

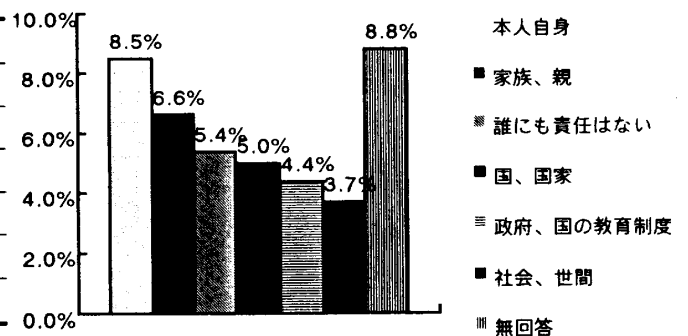


図11 非行者率

が12% (12人) だった。「その他」は大学生 (2%)、中学生が (1%) であった。

表7、図11の麦島の結果によると、ここでも、責任を「本人自身」に求める者は非行者率が高く、またその「親」や「家族」に求める者も非行者率が比較的高い。反対に、その責任を「国」「教育制度」「社会」など、少年の生活を保障すべき組織に求める者は非行者率が低いといえる。さらに、今回の場合も「無回答」を選んだ者の非行者率が非常に高くなっている。

大学生の群をみると、男女共に「教育制度」と答えたものが多くみられる。今回の場合「本人自身」と答えたものは女子より男子に多く、その非行化率は高いといえる。また「世間」を選んだのは女子に多く、高校に進学できないと世間の目が気になってしまうとの考えがあるといえる。この原因として大学生男子は私立学校、大学生女子は県立学校であることから考えられる。

中学生は「教育制度」と答えたのは男子より女子の方が高い。また女子は「親」と答えたものも男子より高くなっている。最も非行化率の高い「本人自身」と答えたのは男女とも同じくらいであった。

大学生と中学生では「教育制度」に半数近くの違いがみられ、本来責任を問うべきものへ責任求めたものは中学生には少なかったようである。また「親」と答えたのは中学生に多くみられる。この場合もやや非行化率が高くなっている。「本人自身」と答えたのはやはり中学生に多く、その非行化率は高いものとなっている。それよりさらに非行化率の高い「無回答」であったのは大学生・中学生ともに女子にわずかにみられた。今回の場合も中学生が非行化率の高い答えを選択していることがわかる。

1)、2)、3)より、全体的にみたところ非行化率の高い答えを多く選択したものはいずれも中学生に多いことが明らかになった。大学生はすでに人格形成ができあがってしまっているためであるともいえるが、現代の中学生は明らかに非行化率の高い答えを選んでしまっているのである。社会的規範からはずれた「非行」にはしるということは、良心や道徳心、また個人の内的抑制ができていないからとであると考えると、その意識は低下しているといえそうだ。また中学生男子と大学生男子を比べたときに考え方に明らかな違いがみられることから、成長していく過程で新たな価値観を学んで行くものと思われる。

ここからの設問は被験者が中学生だった頃のことについて問う。中学生はそのまま答える。

3. 周囲の環境

1) その頃 (中学生は現在) 一緒に住んでいる家族について

「その頃一緒に住んでいた家族について」の問の結果を図12に示す。

結果から、母、もしくは

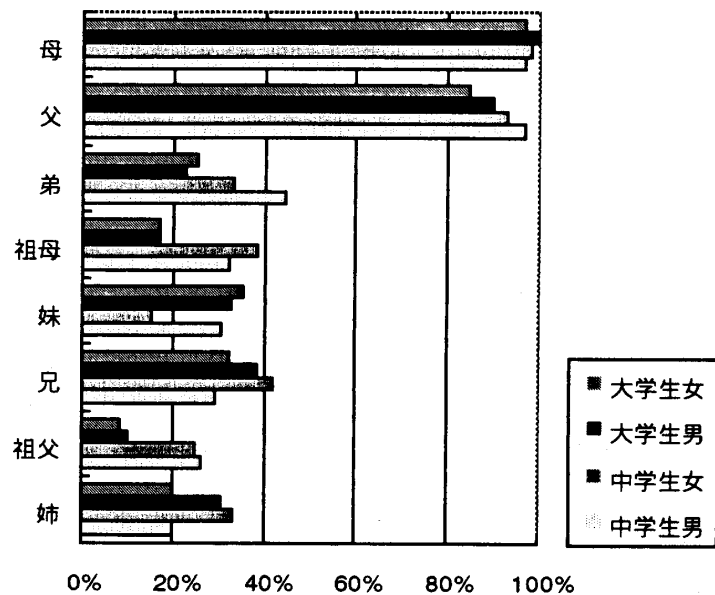


図12 同居家族

テレビ番組が視聴者に与える影響（1）

父と同居していないと答えた人が大学生で全体の0.1%、中学生では全体の13%と中学生に多い。祖父母と同居していない、いわゆる核家族であるのは大学生女子が66%、男子が60%、中学生女子が82%、男子が80%だった。大学生の一人っ子は全体の9%、中学生の一人っ子は全体の11%となった。いずれも中学生の結果に、核家族化、少子化といった現代の家族形態が現れている。

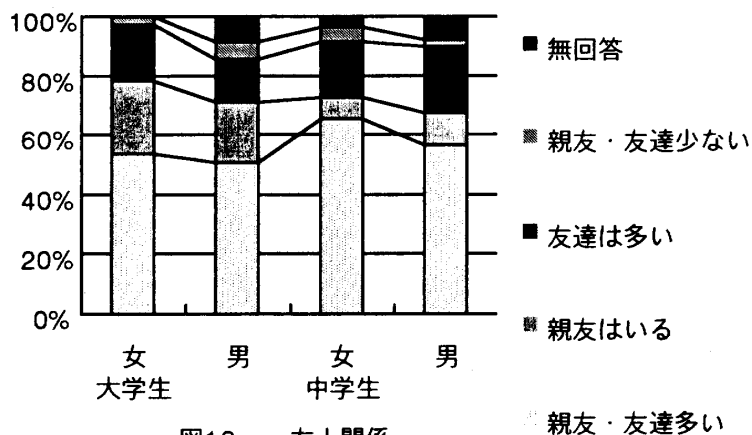


図13 友人関係

2) 友人関係

小学校～中学校時代の頃の友人関係を答の結果を図13に示す。全体的に「親友もいて、友人も多かった」と答えた人が半数を占めている。中学生は大学生に比べ「親友や友達が少ない」と答えた人が比較的少なかった。しかし「友達は少ないが心を許せる親友がいる」と答えた人が大学生に比べると約半分の割合しかいない。また「親友はいないが友達が多い」と答えた人が大学生と比べると若干多い。親友もいるし、友達も多いと答えた人が約6割を占めた中学生だが、一方で、親友と呼べる友達がいないと答えた人が、私たちが中学生だった頃よりもわずかであるが増えている。

3) 自分専用のテレビ

「自分の部屋にテレビがあるか」の結果を図14に示す。「ある」もしくは「2台以上」は大学生182人中女子が20%（13人）、男子は45%（52人）だった。中学生は200人中女子が27%（27人）、男子は31%（31人）であった。

「ない」と答えた人は大学生182人中女子が78%（51人）、男子が46%（54人）で、中学生は200人中女子が73%（74人）、男子が64%（63人）であった。

「ある」と一番多く答えたのは大学生男子で、中学生も男女ともに約3割の人が自分専用のテレビを持っている。

全体的にみると、自分専用のテレビを持っている人は32%（125人）である。「ない」人は全体の63%で中学生で持っている人は思っていたよりも少なかった。自分の部屋を持つ子どもが多くなったと言われている中で、自分専用のテレビがある中学生はまだ

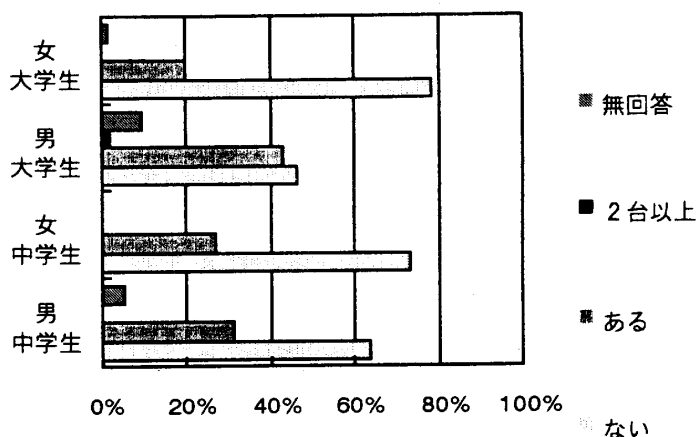


図14 自分の部屋にテレビがあるか

まだ少ないようだ。後の「テレビを観る時間」の結果と関連を検討する必要がある。

4) 誰とテレビを観ていたか
「主にテレビと一緒に観ていた人は誰か」の結果を図15に示す。

大学生182人中「家族」と答えたのは女子が43%、男子が47%であった。「一人」と答えたのは女子が59%、男子が43%。「年下の兄弟」は女子が22%で男子が24%であった。「年上の兄弟」は女子が13%、男子が23%である。「家族」と答えたのは男子に多く、「一人」と答えたのは女子に

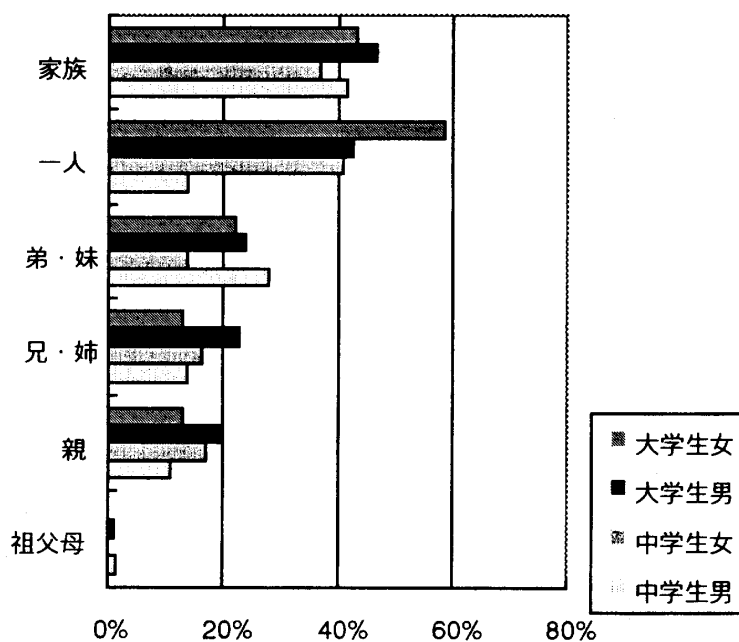


図15 誰とテレビを観ていたか

多い。大学生男子は自分専用のテレビを持っている率が最も高く、また女子は最も低かったが、このような結果となった。

中学生は200人中「家族」と答えたのは女子が37%、男子が42%であった。「一人」と答えたのは女子が41%、男子が14%であった。「年下の兄弟」と答えたのは女子が14%、男子は28%、「年上の兄弟」は女子が16%、男子が14%である。中学生の場合も「家族」と答えたのは男子に多い。また「一人」と答えたのは女子が圧倒的に多い結果となっている。自分専用のテレビを持っている率は中学生の女子と男子では男子の方がわずかに多くなっている。中学生の場合も、女子の方が「一人」でテレビを観ることが多い。

全体的にみたところ「家族」という回答が最も多いのは大学生男子であった。自分専用のテレビの所持率が最も高いにも関わらず、「家族」と視聴する率が高い。また大学生、中学生で女子の方が「一人」で観る率が高いことがわかった。

5) 家族とのコミュニケーション

「テレビを観た後、それについて家族と会話があったか」の結果から、「分からない、無回答」(全体の40%、153人)を除いた有効回答(全体の60%、229人)のみを図16に示す。

「なかった」と答えたのは大学生111人中女子が18%(7人)で、男子が44%(32人)、中学生118人中女子41%(23人)、男子34%(21人)であった。

「約10分あった」と答えたのは大学生111人中女子41%(16人)、男子21%(15人)、中学生118人中女子43%(24人)、男子39%(24人)であった。

「約20分あった」と答えたのは大学生111人中女子18%(7人)、男子17%(12人)、中学生118人中女子7%(4人)、男子13%(8人)であった。

「約30分あった」と答えたのは大学生111人中女子10%(4人)、男子8%(6人)、中

テレビ番組が視聴者に与える影響（1）

学生118人中女子5%（3人）、男子8%（5人）であった。

「約40分あった」と答えたのは大学生111人中女子3%（1人）、男子1%（1人）、中学生118人中女子0人、男子2%（1人）であった。

「約50分あった」と答えたのは大学生111人中女子0人、男子3%（2人）、中学生118人中女子0人、男子2%（1人）であった。

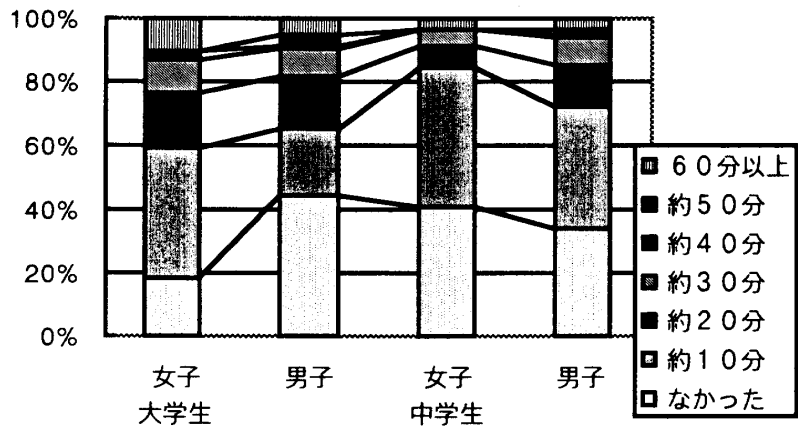


図16 テレビを観た後家族と会話があったか

「60分以上あった」と答えた人は大学生111人中女子10%（4人）、男子6%（4人）、中学生118人中女子4%（2人）、男子3%（2人）であった。

「分からない、無回答」の内訳としては大学生182人中女子14%（26人）、男子25%（45人）、中学生200人中女子23%（45人）、男子19%（37人）である。

大学生をみても、「なかった」と答えたのは男子の方が多く、女子と比べると倍以上にもなっている。女子は「約10分」と答えた人が一番多く見られ、男子の約2倍になっている。また女子は「60分以上」と答えた人が男子より多い。

中学生を見たところ、「なかった」「約10分」と答えたのが女子の方が男子よりわずかに多い。男子は「約20分」「約30分」と答えた人が女子の倍近くに及んでいる。大学生男子が最も「なかった」と答えた率が高かったが、「約20分」～「60分以上」を選んだ人は大学生男女ともに多くみられる。中学生では約20分以上の長めの会話が少なく、中学生は明らかにテレビを観た後の家族との会話時間が短いといえる。

幼い子供は、テレビ番組をわけもわからずに観ることが多い。例えば、1人の人間が犯人によって殺されてしまった。当然人を殺した犯人は悪い人間ということになる。しかしその被害者こそが裏でいろんな人々に悪さをしている悪人だったのだ。犯人の犯行によって救われた多くの人々が犯人に感謝する…このような話があったとき、人それぞれ違った解釈の仕方があるのだ。おおげさかもしれないが、何もわからない子供は『悪い人間は殺してしまっても良い』とか『弱い人間は放っておいたほうが良い』といった間違ったとらえ方をしてしまうかもしれない。最近ではアニメでも『何（誰）が悪くて何（誰）が良いのか』を理解しにくいものがある。そんな中で、今回の結果に中学生の「会話がない」もしくは「約10分」と答えた人が多くみられたことから、番組に対して一方的な考えを持ちやすいと言える。現代の情報や消費社会によって大人と子供とのコミュニケーションが切断された結果であるともいえる。

発展していくメディアへのリテラシー育成として、大人たちが有害であると感じたならば排除もしくは制限し、また子供と共通の話題を持ちコミュニケーションを図っていくことは必要である。

4. テレビ視聴傾向

1) テレビとの接触時間

「一日のうちどのくらいテレビを観ていたか」の結果を図17に示す。

「～30分」と答えたのは大学生182人中女子0人、男子2% (2人)、中学生200人中女子1% (1人)、男子が2% (2人) だった。「～1時間」と答えた人は大学生182人中女子8% (5人)、男子が9% (11人) で、中学生は200人中女子4% (4人)、男子8% (8人) であった。「～2時間」と答えた人は大学生182人中女子が57% (37人) で、男子が28% (33人)、中学生200人中女子は18% (18人)、男子が18% (18人) であった。「～3時間」と答えたのは大学生182人中女子が20% (13人)、男子が38% (44人)、中学生は200人中女子が39% (39人)、男子が32% (32人) であった。「～4時間以上」と答えた人は大学生182人中女子が15% (10人)、男子21% (24人)、中学生200人中女子36% (36人)、男子39% (39人) だった。無回答は大学生男子3% (3人)、中学生女子3% (3人) であった。

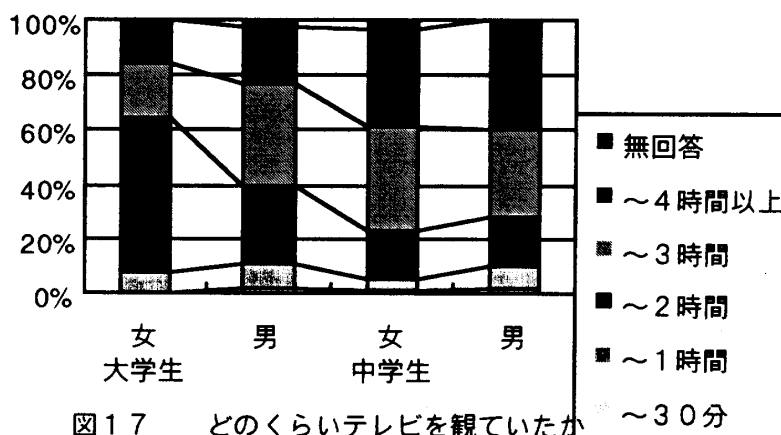


図17 どのくらいテレビを観ていたか

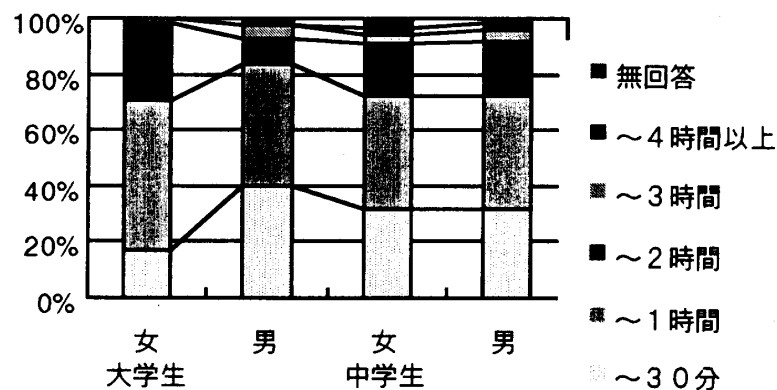


図18 どのくらいアニメをみていたか

大学生をみると女子は「～2時間」という答えが多くみられる。男子は「～3時間」が一番多く、女子の倍以上みられる。「～4時間以上」もやや多い回答である。

中学生は男女とも「～2時間」と答えた人より「～4時間以上」と答えた人の方が多かった。男子は「～4時間以上」と答えた人が中でも一番多かった。大学生が小学生～中学生ぐらいのころに「～2時間」や「～3時間」が多かったことになるが、現在の中学生は「～4時間以上」と答えた人が多く、それだけテレビとの接触率が高くなったといえる。子どもがテレビを観る19:00～21:00の時間帯でさえも、昔のように考えさせられるテレビ番組が少なくなった。今ではバラエティー番組などで簡単に人を殴ったりだましたり悪口を言ったりと、知らない間に暴力的番組に接触し、そのために悪影響を及ぼしかねないのである。そんな中、中学生で多くの人がテレビと「～4時間以上」の長い接触時間であるのは、問題であるといえる。

テレビ番組が視聴者に与える影響（1）

メディア接触率も高くなっていることである。さらに子ども達は社会的規範などの意識が未熟である段階で暴力的なアニメや残虐性の高いテレビゲームをすることは、子ども達の人格に悪影響を及ぼしかねない。今回の調査では、揺るいでいる現代社会、家庭環境に影響され、そこからメディアに対する考え方や意識が様々に変化していることがわかった。しかし、囲まれるメディアに一方的に影響されっぱなしというわけでもない。社会問題に対する意識で中学生は、大人社会がつくり出すメディアに対してしっかりと警戒している者もいたのである。

メディアはこれからますますの発展が期待されている。パソコンによって世界とのコミュニケーションの幅が広がることや、その情報伝達がよりすばやいものになることなど多々ある。しかし、その裏でメディアが人々に影響しかねないこともあるのだ。今回の調査から、メディアからの情報に対応するだけでなく、より幅広い視点でメディアリテラシーを学ぶことが緊要な課題である。しかも対象となる学習者の社会的規範意識の成熟度や家庭での視聴環境をも配慮したカリキュラムづくりが必要である。今後、これらのことをふまえどのようにメディアリテラシーを学ぶべきかを考える必要がある。

[参考文献]

- 佐々木輝美『メディアと暴力』勁草書房 1996
三國 隆三『こどもを殺すな！—犯罪史上の酒鬼薔薇たち』展望社 1997
麦島 文夫『非行の原因』東京大学出版会 1990
堀 孝弘『日本のおもちゃ・アニメはこれでいいのか—企業・消費者・子供の関係を問う』地歴社 1996
前田 雅英『少年犯罪—統計からみたその実像』東京大学出版会 2000

※注1 脱感作理論

人々がメディア暴力に多く接触した場合、暴力に対する感覚が麻痺してしまう。脱感作の測定に関しては実験者による被験者の生理学的反応を基準としている。主な研究者：ドラブマン、渡辺 功など